神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the Meaning of Russian Verbal Nouns －The Case of VYNESENIE

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): Modern Russian, grammar, lexicology 作成者: 岡本, 崇男, OKAMOTO, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2095

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

辞書における動作名詞の意味記述の限界

－ ВЫНЕСЕНИЕ の場合 －

岡本　崇男

1. はじめに

本稿で言うロシア語の動作名詞とは、動詞派生の名詞のうち派生の元となる動詞のプロセス的意味が保たれているもののことを言う。動作名詞は動詞語幹に接尾辞を付加することによって形成される。この機能を有する接尾辞にはいくつかあるのだが、中でも接尾辞 -nij-, -enij-, -tij-, -ij- によって形成されるタイプの名詞が代表的である。このため動作名詞は「-ние, -тие で終わる名詞」と呼ばれることがある。

例えば、以下の文章を見てみよう。

> Молодые парни и подростки сходятся иногда в известные дни, бьются на кулачки для того, чтобы приобрести к ***вынесению*** побоев привычку …, и через то легче сносить телесные наказания, которым они могут впоследствии подвернуться.
>
> Московское государство XV–XVII веков по сказаниям современников-иностранцев. Москва. 2016. стр. 48.

> 青年や少年達は、たまに決まった日に集まって拳固で殴り合いをするのだが、それは殴打に耐える習慣を身につけるためなのである。（中略）つまり、こうした方が、いずれ蒙ることになるかもしれない体罰を耐え凌ぎやすくなるのだ。

例文の中に動作名詞は二つ含まれているが、ここでは太字で示した вынесение（«к ***вынесению***»）のみに焦点を当てることにする。この動作名詞が「耐えること」を意味していることは文脈から自明のことである。つまり、вынести побои「殴打に耐える、殴打を耐え忍ぶ」という動作を名詞化すると

вынесение побоев となり、この語結合が名詞 привычка「習慣」と前置詞 к を介して結びつくと「殴打に耐える習慣」を意味するより大きな語結合が形成されるのである。

しかし、文脈からこの単語の意味を判断できない人、例えば、ロシア語の文章をまだ読み慣れていない日本人初学者は、この単語の意味を辞書で確認しようとするに違いない。また、すでに初学者ではなく、おおよその意味はわかっているのだが、念のために語彙の意味を確認したいという人もやはり辞書を利用するはずである。そこで、現在、日本の出版市場で流通しており、実用的なレベルでの使用に耐え得るロシア語辞典[1]からこの単語に関する記述を拾い上げると以下のようになる。

辞書名	語義
コンサイス露和辞典	提案、議決、判決
博友社ロシア語辞典	（見出し語として記載されていない）
岩波ロシア語辞典	1. 持ち出し；持ち込み　2. 決議、判決；その公表
研究社露和辞典	вы́нести すること
プログレッシブ ロシア語辞典	①搬出　②決議、判決；その公表

вынесение が動詞 вынести から派生した名詞であることがわかる程度には造語法を知っている人であっても、この名詞が辞書の見出し語となっていれば、先ずは辞書に記述されている語義で使われていると考えるに違いない。例えば、『コンサイス露和辞典』（これ以降『コンサイス』と呼ぶ）や『岩波ロシア語辞典』（これ以降『岩波』と呼ぶ）で вынесение の語義を調べた学習者は、この単語に「耐えること」という意味があるとは思わないだろう。この点で、『博友社ロシア語辞典』（これ以降『博友社』と呼ぶ）や『研究社露和辞典』（これ以降『研究社』と呼ぶ）のように、この単語を見出し語に採用していない辞書や派生元の動詞のみを指示している辞書を使った人は、もちろん造語法の知識を持ち合わせていることが前提条件ではあるのだが、「仕方なしに」動詞 вынести の一連の語義を参照しながら、вынесение が名詞 побои「殴打」の生格形 побоев と結びついていることを考慮して、「（殴打を）運び出す、持ち出す」よりも「（殴打に）耐える、（殴打を）耐え忍ぶ」の方がこの文脈に相応しい意味であるとい

[1] 「実用的なレベルでの使用に耐え得る」辞書というのは、それを利用することで新聞記事、インターネット上の情報、文学作品、論文などの大意が掴める程度の収録語彙数があり、それぞれの語彙に対して適切な文法情報が与えられているものという意味であり、必ずしも高度に専門化された分野の語彙、新語、俗語、外来語、雅語が豊富に収録されているということではない。

う結論に達するかもしれない。しかし、ロシア語の文章を読み慣れていない学習者にとって、辞書の見出し語になっていない単語の意味を自分の経験に基づく推論によって導き出すことや辞書に書かれていない意味をあえて訳語とすることには、相当な勇気を必要とするはずである。

それでは、なぜこのような不都合な事態が放置されているのだろうか。本稿では、その原因を辞書の編集方針と動作名詞の語義決定の困難さという二つの観点からの考察を試みる。

2. 辞書の編集方針と動作名詞との関係

2.1. 露和辞典の事情

日本で流通しているロシア語辞典に вынесение の語義として「耐えること」という記述がない理由の一つは、どのような辞書にも見出語数には制限があるということであろう。実用的なレベルでの使用に耐える辞書というのは、汎用性と専門性の双方の観点から語彙が収録されているはずで、この目標を達成しようとすれば自ずと語彙数が増加してしまう。しかし、辞書の物理的な大きさや価格が適正であることも実用性を満たすために必要な条件であるので、結局実用的な辞書というのは、収録語彙数、語義解釈の詳しさ、物理的な規模など種々の要求を編纂者たちが検討し、折り合いをつけた結果であると考えれば良い。

『博友社』は「はしがき」の中でこの辞書の第一の特徴として「語彙を、現代語を主とする約 50000 語にかぎった」[2]ことを挙げている。その理由は同書が「初学者の中辞典として編集されたもの」であるからなのだが、だからといってたんなる初心者向けの学習辞典として意図されたのでないことは、先に引用した語彙数の制限に続く説明を読めば明らかである。曰く、「これは（=語彙数を制限したことは）初学者の検索の便を図るという目的もあるにはあったが、ひとつには生きた現代ロシア語を如実に反映させたいという編者らの意図の表れでもあった。したがってプーシュキンやゴーゴリなどの古典作品に見られる語彙でも、現代においてあまり用いられなくなったものは容赦なくけずった。その反面、編者らは現代ロシア語で書かれた各種文献の語彙は、俗語や特殊な専門用語の類を除けば、本書によってほぼ完全にカバーできたものと期待している」。つまり、「初学者向けの中辞典」だといっても、これは本稿の前節で言及された「実用的なレベルの使用に耐える」辞書を目指して作られたものなのである。従って、見出し語を 5 万に制限するという編集方針のために、任意の

[2] 本稿では『博友社ロシア語辞典』第 1 版の「はしがき」から引用した。

動詞からかなり自由に作ることができる -ние, -тие のタイプの派生語を見出し語に採用することに編者は慎重にならざるを得なかったのだが、そのことが同書の実用性を大きく低下させるとは考えなかったのかもしれない。この意味で、『博友社』は、вынесение の語義を書かずに派生元の вынести を指示するに留めた『研究社』と方針の上で大きな違いがないということができるのかもしれない。

しかし、語彙数の制限がある辞書でも動作名詞が見出し語になるのは特に珍しいことではない。例えば、『博友社』をやや上回る 60000 語が収録されている『プログレッシブ ロシア語辞典』（これ以降『プログレッシブ』と呼ぶ）では、前節で示した一覧表に見られるように вынесение が見出し語になっていて、「①搬出　②決議、判決；その公表」というように語義も書かれている。少なくともこの語彙項目に関して言えば、この辞書の二倍以上の見出し語を擁して（13万語）、大辞典の範疇に入る『岩波ロシア語辞典』（これ以降『岩波』と呼ぶ）と同等の配慮がなされていることになる（後者の語義解説は「1. 持ち出し；持ち込み　2. 決議、判決；その公表」）。ところが、『岩波』のさらに二倍の収録語彙を持つ大辞典である『研究社』では вынесение が見出し語となってはいるものの、語義の説明は「вынести すること」だけである。

露和辞典における動作名詞 вынесение の扱いにはもう一つ問題がある。本稿の「はじめに」で述べたように、この名詞は「(殴打に) 耐える・耐え抜くこと」を意味している。ところが、この名詞に語義説明を付けている『コンサイス』、『岩波』、『プログレッシブ』のいずれの辞書にもこの意味は書かれていない。辞書は規範書的な性格が強いので、辞書にない訳語を当てることに抵抗を感じる人は少なくない。従って、文脈を読み取る努力をせずに辞書の訳語のみに頼ろうとする学習者は вынесение побоев のために「殴打を提案する」とか「殴打を決議する」などという訳語を捻出してしまうのである。

このように、動作名詞が見出し語になるかならないか、見出し語になったとしても丁寧な語義記述がなされるかどうかは、どうやら収録語彙の大小のみで決まるものではないらしい。それでは、一体何によって決まるのだろうかという疑問が生ずる。また、語義記述がなされる場合に、語義はどのようにして決定されているのかということにもやはり疑問を抱かざるをえない。おそらく、これらの事柄の決定の基準を知る手がかりは、ここで名前の上がった日本の代表的な露和辞典を作る際に参考にした辞書の編纂方針にあるのかもしれない。なぜなら、日本で出版された露和辞典は主として旧ソビエト連邦およびロシアで出版された幾つかの辞書を下敷きにして作られているからである。そして、これらの複数の手本のうちのどの辞書の見出し語選定を参考にするかによって、

動作名詞が見出し語になるのか、語義説明が行われるのか、そしてどの語義が選択されるのかが決定されていると仮定して差し支えないと思われる。つまり、露和辞典の作成に際して、ベンチマーク的な辞書があり、その辞書に収録されている語彙は親見出し語ないし小見出し語として必ず採用する。そして、語義の説明を書くか他の見出し語への指示に留めるのかもベンチマーク辞書に従い、語義の選定もやはりその辞書を踏襲することを基本として露和辞典が編纂されていると仮定するのである。

2.2 ロシアで出版されたロシア語辞典の編纂方針

ベンチマーク的な辞書があるということは筆者のたんなる想像の産物ではない。例えば、『博友社』第 1 版（1975 年）では見出し語の選定にかんして以下のように丁寧に説明がなされている。

> 見出し語の選定にあたっては、Ожегов [18]（第 5 版）〈…中略…〉および Смирницкий [22] の両辞書の採録語数を合わせた約 60000 語の中から、Никонова [17], Дворецкий [7], Зарубин [9], Даглиш [6] および Ожегов [18]（第 9 版）[3]の諸辞書によって、現代ロシア語の標準的語彙(い)と考えられるものを選んだ。

上記の辞書のうち二度名前が挙がった Ожегов（第 5 版および第 9 版）が露露辞典、Смирницкий と Даглиш は露英辞典、Никонова は露独辞典、Дворецкий は露波辞典、Зарубин は露日辞典である。『博友社』改訂版（1995 年）においては Ожегов の辞書のみ新しい版が使われているだけで（第 9 版を基本として第 21 版を参考にした）、他の対訳辞書は版も変わっていない。結局、『博友社』は旧ソビエト連邦およびロシアで出版されたロシア語辞典の中でも 1949 年以降ソ連およびロシア本国で標準的な「国語辞典」として使われ続けている C. Ожегов の Словарь русского языка（1992 年以降 Толковый словарь русского языка と改名 — これ以降 Ожегов と呼ぶ）が語彙選定の第一の基準の役目を果たしていることがわかる。

『岩波』も見出し語選定のための辞書を明らかにしている。こちらはソビエト科学アカデミー・ロシア語研究所が編纂した Словарь русского языка в 4 томах の第 2 版（これ以降、СР4 と呼ぶ）と Ожегов の第 9 版および第 21 版である。

---

[3] 『博友社』第 1 版の参考文献リストでは一つの文献番号（18）の元に C. Ожегов 編の Словарь русского языка の第 5 版と第 9 版が列挙されている。

ちなみに、Ожегов は第 9 版の収録語彙が 57000 語ほどであったのだが、ソビエト崩壊以後も改訂増補が続けられ、21 版（1989 年）は約 70000 語を擁する 1 巻本の中辞典となった。一方、CP4 は収録語彙こそ第 2 版でも 83,016 と Ожегов よりもやや多い程度なのであるが、語義記述の精密さと用例の豊富さ（例文が長いので文脈がわかるようになっている）のために 4 巻本になっている。

見出し語選定の基準を明確にしていない『プログレッシブ』は、収録語彙数（60000 語）から推測して、やはり Ожегов の第 21 版の改訂版である *Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю.,* Толковый словарь русского языка (4-изд., 1997) に依拠したのではないかと思われる。

現行の『コンサイス』第 5 版には語彙選定の基準になった辞書に関する言及がないのだが、1977 年に出版された第 4 版には「ソ連のアカデミー版ロシア語辞典（4 巻）、オージェゴフのロシア語辞典、ウシャコフの詳解ロシア語辞典（4 巻）、ザルービン・ロジェツキンの露日辞典の全語句、アカデミー版現代標準ロシア語辞典（17 巻）の大部分の語彙のほか、種々の専門語辞典や学術書から理工科語を中心とする数万語を採り、収録語の数は全部で十数万語にのぼる」と書かれているので、やはり CP4 と Ожегов が基準となっていることは明らかなのだが、大辞典に匹敵する語彙を収録するためには CP17（150000 語収録のいわゆる「17 巻本」）は無視できない。このことはやはり 130000 語が収録された『岩波』でも同様であろう。

2.3. Ожегов および CP4 における вынесение の扱い

Ожегов において вынесение は親見出し語ではなく、動詞 вынести の説明の最後に派生語の一つとして以下のように示されている。

> ‖ *сущ.* **вы́нос**, -а. *м.* (к 1 и 2 знач.), **вы́носка,** -и, *ж.* (к 1 знач; разг.) и **вынесе́ние**, -я *ср.* (к 1, 2, 4 знач.).

вынесение は 3 つの派生名詞のうちの一つで、動詞 вынести の 1, 2 および 4 の動作の意味が保たれているということである。動詞の 1 の意味は «неся, доставить наружу»「持ち出す」、2 の意味は «переместить куда-н., выдвинуть»「移動させる、前へ動かす」、4 の意味は «постановив о чем-н., объявить»「決定して公表する」である。動詞の 5 番目の意味に «вытерпеть»「耐え忍ぶ」があるのだが、これは вынесение の意味ではないことになっている。

CP4 では вынесение は見出し語となっているのだが、以下に示すように語義は書かれておらず、動詞の項目説明を参照するように指示されている。

ВЫНЕСЕ́НИЕ, -я, *ср. Действие по глаг.* вы́нести — выноси́ть (в 1 и 6 знач.) *Вынесение приговора.*

CP4 で動詞 вынести の 1 の基本的な意味は «неся, удалить откуда-л., унести за пределы чего-л.»「持ち出す」、6 の意味は «в сочетании с существительными решение, постановление, приговор, благодарность и т.п. означает: приняв (в результате рассмотрения, обсуждения) какое-л. решение, объявить о нем»「特定の名詞（решение, постановление, приговор, благодарность など）との結合において、『何らかの決議をして、それを公表する』という意味を表す」とある。例文 «вынесение приговора» は「判決を下すこと」という意味なので、6 の意味の用例だということになる。なお CP4 では вынести の 4 番目の意味として「耐える・耐え忍ぶ」（«устоять, не сдаться перед лишениями, трудностями; выдержать, перенести»）が記載されている。

動作名詞 вынесение が『博友社』で見出し語になっていないのは Ожегов と CP4 においてこの単語の扱いが軽いことにあるのだろうし、「耐えること」という意味がどの露和辞典にも見当たらないのも二つの代表的な露露辞典にその旨が書かれていないからなのであろう。派生語の意味記述については、Ожегов に次のような説明がある。

> …если производное слово в гнезде относится не ко всем значениям многозначного слова, после производного слово дается в круглых скобках указание «к такому-то (№) знач.»…
>
> もし語群における派生語が多義的な単語のすべての意味に関係するのではない場合、派生語の後に丸括弧で囲んで「何番目の意味」（見出し語）という指示が与えられる

CP4 には Ожегов のような説明がないのだが、«в 1 и 6 знач.» というような指示もやはり見出し語の「何番目の意味において」という指示であるに違いない。従って、これらの辞書を基準とすれば、вынесение に「耐える」という意味を与えることはできない。

先に示した Ожегов の例を見ればわかるように、動詞 вынести から 3 つの名詞が派生しており、それぞれ意味の領域の広さが違っているのは特別な現象ではない。また、「耐えること」という意味を表す語彙は выдержка, выдерживание,

терпение などを始めとして相当数ありそうなので、вынесение に вынести が表すことのできる動作の意味をすべて持っていなくても支障はなさそうである。ところが、ソビエト崩壊以降に出版された БТС には вынесение に「耐える、耐え抜く」（«вытерпеть, выдержать»）という意味が保たれていると書かれているのである。言葉の意味は時代とともに変化するので、かつてあった意味が失われたり、逆に新たな意味を獲得したりすることがあっても不思議ではない。

それでは、вынесение が「耐えること」という意味で使われるようになったのは新しい現象なのだろうか。

実は本稿の冒頭に提示した文章は 17 世紀にモスクワ大公国を訪れたアダム・オレアリウス（Adam Olearius）というドイツ生まれの教養人の見聞録からの引用である。この記録のロシア語訳が出版されたのは 1870 年のことである[4]。つまり、вынесение が「耐えること」という意味を表すことは決して新しい現象ではなく、19 世紀後半には一般的であったと考えてよいのだろう。そして、この見聞録のロシア語訳が世に出てから 1 世紀以上後に出た辞書にも相変わらず同じ意味が保たれたと推測することも可能であるように思える。しかし、もしそうであれば、20 世紀後半のソビエト時代に模範的なロシア語辞典の地位を保っていた Ожегов と СР4 で動作名詞 вынесение の意味として「耐えること」がないことになっているという事実との間に齟齬が生じてしまう。

そこで、次節では вынесение に時間の経過による意味の変化があったのかどうかについて他のロシア語辞典においてこの語彙がどのように扱われてきたのかについて検討する。

2.4. Ожегов と СР4 以外の辞書における вынесение の意味記述

辞書の編纂には相当な年月が費やされるはずなので、辞書が出版された時点で、幾つかの語義や用法はすでに時代遅れになっている可能性もある。従って 19 世紀後半に動作名詞 вынесение（および動詞 вынести）がどのような意味で使われていたのかを知るためには 19 世紀末ないし 20 世紀初頭に出版された辞書で確認すればよいのかもしれない。ちょうどその時期のものである СРИА を見ると、вынесение は見出し語になっていないのだが、動詞 вынести（この辞書では見出し語が выносить となっている）に転義として «вытерпливать, сносить»「耐える、我慢する」と記述されている。

次に、Ушаков（1935 年）では、動作名詞が見出し語となっており、意味の記述なしに動詞 вынести–выносить への指示がある。なお、文体に関する記述が

[4] *Адам Олеарий,* Подробное описание путешествия голштинского посольства в Московию и Персию в 1633, 1636 и 1639 годах. Пер. Павла Барсова. М., 1870. [Бочкарев, 21]

あり、この語彙が文語体に属することが明記されている（«*книж.*»）。そして、動詞 вынести（見出し語は выносить）には «выдерживать, осиливать что-н.»「耐え抜く、打ち克つ」という語義が書かれている。

第二次世界大戦後に出版された一般に「17 巻本」と呼ばれる大辞典では親見出し выносить の中の小見出しとして вынесение が記載されていて、語義説明も添えられている。これによると、第一の意味が «несение чего откуда-либо»「どこかから何かを運ぶこと」、第二の意味が «объявление»「公表」とあって、後者には «вынесение приговора (на суде)»「（裁判において）判決の申し渡し」という日本の多くの露和辞典でも馴染みのある用例が示されているのだが、「耐える」に類する意味は示されていない。一方、動詞の意味を見ると、最後の方に «выдерживать на себе или в себе какую-либо тяжесть»「重荷を背負う、重荷に耐えること」という記述が見られる。ただし、вынести–выносить がこの意味で使われている文の例は В.А. Жуковский（1783–1852）と И.А. Крылов（1769–1844）から採られたものであるので、「耐える」という意味はこの動詞にとってすでに古い語義に属していると思わせるふしがある。

19 世紀末から 20 世紀半ばまでの有力な辞書の記述から、вынести および вынесение に対して辞書編纂者たちが持っていた認識を推測すると次のようになる。すなわち、動詞 вынести が「耐える」という意味を表すのは、すでに古い語法に属している。また、動作名詞 вынесение 自体が文語的なニュアンスを帯びていて、この語彙を使用できる場面に大きな制約があり、なおかつ「耐えること」という古びた意味が動作名詞に受け継がれることはもうなくなっている、ということである。

この傾向は、1991 年から 1994 年まで刊行された未完の大辞典 СР6 と現在刊行が続いている БАС においても変わっていない。

СР6 では、見出し語 вынесение は動詞 вынести の「1, 3, 6 および 12 の意味」を持つとされ、«вынесение за скобки»「括弧を外すこと」と «вынесение приговора»「判決の申し渡し」という二つの例が示されている。そして「耐える」に類する意味は 9 番目に挙げられていて（«выдерживать какую-л. физическую нагрузку, тяжесть и т.п.»「なんらかの肉体的な負荷、荷重などにたえる」）、この意味を動作名詞は引き継がない。

БАС は СР6 が下敷きになっているようで、両者の間に вынесение と вынести に関する意味記述の違いはほとんど見られない。動詞の意味が 1 から 12 まで挙げられているところも同じであり、それぞれの語義解釈も同じである。ただし、動作名詞の意味が動詞の「1, 3, 6, 8 および 12 の意味」を引き継ぐことになっている。вынести の 8 の意味というのは «помещать, располагать что-л. (обычно в

некотором отдалении, в стороне от чего-л.)»「(どこか離れた所、傍に) 置く」なのであるが、この意味が動作名詞の語義として追加された理由はわからない。

このようにロシアの代表的な辞書を見る限り、動作名詞 вынесение に「耐えること」という意味があるとは思えない。この点でやはりソビエト崩壊以降の言語規範が明文化されているはずの БТС が動作名詞 вынесение に「耐えること」という意味があることを積極的に示していることには驚きを禁じえない。

ここで、言語規範という立場を離れて、現実に вынесение がどのような意味で使われているのかをロシアの「ナショナル・コーパス」(Национальный корпус русского языка) [5]で調べてみると、全部で 138 例 (120 の資料) のうち「耐えること」の意味でこの動作名詞が使われている例は一つもなかった。出現頻度が最も高いのは вынесение と решения, предписания, приговора などとの結合例で、動作名詞 вынесение は動詞 вынести の意味のうち「提出する」、「(決定を) 公表する」などの意味を引き継いでおり、まれに「(別の領域・空間に) 移動する」、「置き換える」、「持ち出す」という意味を表すことがあるのだが、それは 20 世紀前半の、つまり古い時代の現象であるらしい (— Ваше превосходительство, я неоднократно вам докладывал, что *вынесение* позиций на правый берег — рискованно. [А.Н. Толстой, 1922]「陛下、何度もご報告いたしましたように、陣地を右岸に移すことは危険を伴います」; Единственное спасение от отчаяния — *вынесение* из себя своего я「絶望から救われる唯一の道は、自分の中から自我を追い出すことだ」[Л.Н. Толстой, 1900–1901])。

3. 結語

テキストを読んでいて知らない語彙に出会い、前後の文脈からその語彙の意味の見当がつけられないのだが、どうしてもその意味を確認したければ、辞書を利用することになる。しかし、仮に辞書に記述されている事柄が言語事実を正しく反映していたとしても、それらは最低限の正しい情報であって、それらによってすべてが解決するわけではない。これまで見てきたように、動作名詞 вынесение 一つをとってみても、その意味内容を適切に記述している辞書があるとは認め難い。語彙の意味が時間とともに変化するとしても、その変化をどのように記述するのか、つまり意味の変化を利用者にどのように提示するのかは編集者の言語観 (特に規範意識) に大きく左右されると思われる。また、ページ数などの物理的な条件によっても制約を受けていることを我々は辞書の使用に際して念頭に入れておく必要がある。

---

[5] 英語の呼称は Russian National Corpus である。URL は http://ruscorpora.ru/

参考文献

БАС Большой академический словарь русского языка. Москва. 2004 – .

БТС Большой толковый словарь русского языка. Москва. 2004.

КРГ Краткая русская грамматика. Москва. 1989.

Бочкарев *Бочкарев В.*, Московское государство XV–XVII веков по сказаниям современников-иностранцев. М. 2016.

Ожегов *Ожегов С.И.* (ред.), Толковый словарь русского языка. 2010.（電子辞書）

РГ80 Русская грамматика. I. Москва. 1980.

СР4 Словарь русского языка в 4 томах. Изд. 1-е. Москва. 1957–1961; Словарь русского языка в 4 томах. Изд. 2-е. Москва. 1981–1984.

СР6 Словарь современного русского литературного языка. Москва. 1991–1994.

СР17 Словарь современного русского литературного языка. Москва. 1950–1965.

СРИА Словарь русского языка, составленный вторым отделением Императорской Академии Наук. Вып. 2. Втас — Да. С.-Петербург. 1892. （リプリント London. 1980）

СЦРИА Словарь церковно-славянскаго и русскаго языка, составленный вторым отделением Императорской Академии Наук. Т. 1. 2-е изд. Санктпетербург. 1867. （リプリント Leipzig. 1972）

Ушаков *Ушаков Д.Н.* (ред.), Толковый словарь русского языка. М. 1935.（リプリント 東京. 1976）

参考にした露和辞典

『岩波ロシア語辞典』. 1992 年.

『研究社露和辞典』. 1988 年.

『コンサイス露和辞典』（三省堂）. 第 4 版, 1977 年. 第 5 版, 2005 年.

『博友社ロシア語辞典』第 1 版, 1977 年. 改訂新版, 1995 年.

『プログレッシブ　ロシア語辞典』（小学館）2015 年.

Keyword(s): Modern Russian, grammar, lexicology